

# 李白と酒

杉 下 一 成

李白は、杜甫と並び称される盛唐の偉大な詩人であるが、李白といえば酒、酒といえば李白と言えるほどに、李白と酒とは切っても切れない関係にある。

例えば酒にまつわる彼のエピソードに次のようなものがある。

李白は、彼の文章を見て「君は謫仙人（天上からこの世に流された仙人）だ」と感嘆した賀知章の推薦によって玄宗に仕え、翰林院供奉として供奉することになったのだが、それでもなお飲み仲間と盛り場で酒に酔っていた。ある時、帝が沈香亭に御座していた時、感ずる所があったのでそれを李白に作詞させようと召し出したところ、李白はすっかり酔い潰れていた。左右の者が顔に水をかけると少し酔いがさめ、筆をとり、たちまち文をつくりあげた。その作品は、華麗で美しく、詳しくかつ適切で、しかもすらすらできて、途中で考えたりして沈滞することはなかった。帝は李白のその様な才能を愛し、しばしば暇なときにお目見えすることを許した（『旧唐

書』および『新唐書』李白伝参照）。

また、李白の死に関して、『旧唐書』では、酒を飲み過ぎたために、宣城で醉死したとしているが、宋の洪邁の『容齋隨筆』巻三には、

世間によく言われていることであるが、李白は当塗県の采石にいた時に、酒に酔って揚子江に舟を浮かべ、浮かぶ月影を見て、身を俯せてこれを取ろうとして溺れ死んだ、ということである。

とある。この話はかなり信じられていたらしく、「太白捉月」という故事にまでなっているくらいである。

そんな彼を杜甫が「飲中八仙歌」で次のように評している。

李白は一斗詩百篇

長安市上 酒家に眠る

天子呼び來たれども船に上らず

自ら稱す臣は是れ酒中の仙と

（李白は酒を一斗飲むうちに詩が百篇できる。長安市中の酒屋で眠っていて、天子からお召しがあっても船に上らず、自分のことを酒中の仙だと称している。）

この中で、「酒中の仙」だと称していることは注目すべきである。このように、彼は酒豪ぶりを發揮しながら、常識を逸脱した俗人離れした行動を取ったり、泥酔しながらみごとな詩をたちどころに作り上げたりするなど、豪快で奔放な性格を持った天才詩人であるといえよう。もっとも、李白の死に関するものは伝説であらう。しかしながら、こうした伝説すら生むほど彼は酒と深く関わっていたのである。

さて、李白の飲酒詩であるが、これまでは多くの人々に鑑賞されているものの、総合的な見地に立って考察したものはさほど見あたらないように思われる。ところが、李白は酒をメタファーとして、自己の心情を吐露しており、そこに詩人李白の本領が發揮されているのではないだろうかと考えられる。そこで、本稿では、飲酒詩を詳細に検討し、その詩境を分析することで、飲酒詩人李白の人物像を探ってみたい。

## 二

まず、李白の飲酒詩について分析したい。ただし、ここで言う飲酒詩とは詩の中に「酒」という字があるかどうかということではなく、李白自身の酒について言っている箇所があるものである。まず、飲酒詩の数についてであるが、李白の詩千四十一首中、百九十二首あ

った。全体の約十八コンマ五パーセントが酒の詩だったわけである。五首のうち一首とまではいかないが、それに近いだけのものが酒の詩だったわけであるから、やはり多いと言えるだろう。

詩中に述べられた酒としては、「美酒」、「清酒」、「白酒」、「緑酒」などが出てくる。篠田統『中国食物史の研究』（八坂書房、一九七八）によれば、李白は濁り酒や清酒も飲んでいたようである。

詩の形式については近体詩よりも古詩（特に五言古詩）が多く、飲酒詩のうちの六割五分近くに及んだ。これは、李白が自由奔放に自分の思いを述べ、形式に余りこだわらないで詩を作ることが多かったためであろう。

次に、李白の飲酒詩を内容的に大別してみると、別れの酒の詩や、美しい自然を眺めながら酒を飲む詩、宴会の詩、大勢の友と遊ぶ詩、友に御馳走になる詩、妻や子进行する詩、人に自分を売り込む詩、人生無常を歌い、樂しめる時には飲んで楽しむという詩、さらに、非現実的な仙界に遊ぶ詩（いわゆる遊仙詩）などが挙げられる。

ここで、遊仙詩について注目してみたい。まず、例として「來日大難」を見てみたい。

來る日一身

糧を攜へ薪を負ふ

道長く食盡き口を苦しめ唇を焦がす

今日酔飽するは

樂しみて千春を過ぐ

仙人相存し

我を遠學に誘う

海三山を凌ぎ

陸は五嶽に憩ふ

龍に乗り天に飛び

目に兩角を踏る

授くるに仙藥を以てし

金丹握に滿つ

蟪蛄恩を蒙り

深く短促を愧づ

東海を墳めんことを思ひ

強ひて一木を銜む

道は天地よりも重く

軒は廣成を師とし

九五を蟬翼とす

以て長生きを求む

下士大いに笑ふも

蒼蠅の聲の如し

（今日に至るまでの私の一身は、食料を手に携え薪を背負って旅しているようなものであった。道が遠いために食料は尽き、口は苦しくなり唇が乾くといった有様だった。その頃に比べて私の今日の生活は、酒に酔って飽きるほど食料を食べることができ、この樂しきは千年以上

も続くかのようなものである。こうしていると仙人が現れ訪ねてきて、私に神仙の道を学ぶように誘ってくれる。それでその勧めに従い、海を渡っては東海の三仙山を越え、陸を行っては五嶽各々に登って憩うこともある。行くにあたっては龍に乗って天を飛ぶのであり、そうしていると、自分の目には龍の両方の角が見えるだけである。やがて仙人の世界に着いてみると仙人が私に仙藥を授けてくれるが、その仙藥金丹は手に一握りだけである。思うに、ひぐらしやむぎわら蟬は天地の恩を蒙っているが非常に短命であるが、私も平凡な人間であるためこれらの蟬たちと同じく短命で終わってしまいたいそうで、長寿の仙人に対して恥ずかしく思う。女娃（じょあい）は東海で溺れ死んだことを恥じ、その魂が「精衛」という鳥になり、西山の木一本一石をくわえては、絶えず東海に運んで少しでも水を浅くしようと努めている。（自分もその様に少しでも仙人から道を教えてもらい少しでも長命になるように努力しよう。）道の大切さは天地よりも重いものである。昔黄帝は仙人廣成を師として道を学んだという。それで儒学の道など蟬の翼のように軽く考えていた。真の道を理解しない下等な人々が私の学ぶ道をおろかなこととして笑うだろうが、私から見ればその様な人々の言葉は青蠅の鳴き声のような下等なものにしかならない。）

「来る日一身」から「樂しみて千春を過ぐ」までは、

かつての生活が苦しかったこと、それに比べて今は夢のような生活をしていることを語り、「蝮蝸恩を蒙り」から最後まででは、仙人の道を求めたいということ述べている。そしてそれらの間の「仙人相存し」から「金丹握に滿つ」までは、まさに仙界に遊んでいるものである。

他にも、「擬古十二首その十」や「泰山に遊ぶ六首その一」の後半部分などにも、李白が仙界に遊ぶ場面がある。

このように李白は、道教を極めようとし、神仙の世界を求めようとしていたわけだが、もちろん、彼の詩に表れているような仙界を実際に目で見えていたわけではあるまい。李白の遊仙詩について、阮廷瑜『李白詩論』（国立編訳館、一九八六）では「……仙を言ふは、借りて以て不遇の懷を抒（の）ぶ。仙に託すは、方に遠く蹈（ある）き世を忘るることを得、懷を放ち自ら遣る。求仙は、世と伍を爲すを肯ぜざるを示す。……仙に遊び藥を採るの語は、因りて托む所を寄すに過ぎず」（第一章「飲酒與求仙」と論じている。要するに、思いを仙界に寄せることによって現実を離れ、憂いを晴らそうとしていたというのである。

考えてみれば、先に見た三首の遊仙の詩は、いずれも酒を飲みながら作ったものと思われる。ということは、ここに一つの図式が見えてくる。それは、酒が一種の遊離記号のようになってそれによって現実を離れ、心を仙

界に遊ばせて様々な憂いを晴らしていた、というものである。このようにして李白は、酒というものを媒介として、現実の世界にいながら非現実的な仙界を享受しているのである。

次に、李白が酒に対してどのような考えを持っていたかを見てみたい。まず、彼の多くの詩の中に表れていることだが、李白は、美しい自然の下で酒を飲み、愁いも何もかも忘れて酔い潰れてしまうのが最高の境地であると考えていたようである。例えば、「襄陽歌」では、「清風朗月 一錢の買うを用ひず。玉山自（おのづか）ら倒る 人の推すに非ず」（美しい自然に対して酒を飲み、酔いつぶれるにあたっては、人が推して倒れるのではなく、竹林の七賢の一人嵇康がそうであったように、容貌の美しい人がなよなよと酒に酔い崩れるように、ひとりで倒れるのである）とあるし、「月下獨酌その三」にも、「醉後天地を失ひ、兀然として孤枕に就く。知らず吾が身有るを。この楽しみ最も甚だしと爲す」（酔ってしまえば天地万物全てを忘れて忘却の境地になり、無意識のうちに枕に着く。そうすると自分の存在さえ分からなくなる。このような、酔って全てを忘れてしまう楽しみこそ最高のものである）とある。

また、「襄陽歌」に「咸陽の市中に黄犬を歎くは、何ぞ月下に金の壘を傾くるに如かん」（秦の李斯が讒言によって殺されるとき、自分の子に対して、おまえと黄犬

をつれて狩をしたいが、今となってはそれもできないと言つて嘆いたというが、李斯のような高位高官になるということも、どうして月の下で楽しく飲むことに及ぼうか、とても及ぶものではない」とあるように、李白は、いたずらに高い地位を求めるとも、美しい自然の下で酒を飲むことのほうが上だと思つていたようだ。

さらに、「月下獨酌その二」では、「賢清すでに飲む。何ぞ必ずしも神仙を求めん」（清酒は聖人に例えられ、濁り酒は賢人と言われている。だから清酒や濁り酒をすでに十分飲むならば、どうして神仙など求める必要があるろうか、ありはしない）とあり、実際に仙界を求めるよりも、酒を飲んで幻想的な世界に遊ぶことのほうが勝ることであり、酒こそ安住の地であるとしている。このように李白は、仙界よりも酒のほうに現実を見ていたのである。

### 三

前項で見たように、李白は酒こそ第一だと思つていたものの、出世願望が無かつたわけではない。例えば、「古に效ふ二首その一」では「早達は晩遇に勝る。垂釣の翁に比するを羞づ」（早く栄達するのは晩成に勝るものだ。だから私は老人となるまで釣りをしていた太公望に比せられることを恥ずかしく思う）とあるし、「梁四東

平に歸るを送る」では「殷王負鼎を期し、汶水垂竿を起す。學ぶ莫かれ東山に臥し、參差（しんし）として謝安を老いしむるを」（昔伊尹（いいん）が鼎とまな板を背負い料理人を装つて殷の湯王に近付き、やがて認められて大臣となり湯王を助けて天下の君ならしめたというが、君もいつまでも、汶水のほとりで釣をしているような生活をしていないで、はやく世に出て志を遂げるべきだ。昔晋の謝安は東山に起臥して風雅の遊びに耽つていたというが、その謝安を学んでいつの間にか老いてしまったということがあつてはならない。今のうちに世に出て名を挙げるようにしなければならぬ）とある。他にも李白の出世願望を思わせる詩がいくつもあり、彼に政治の世界で名を上げたいという気持ちがあつたことは間違いない。

しかし、前章で見たように、李白にはもう一方で野や山で生活しながら仙界を求めようとする求仙願望があつた。考えてみると、この二つの願望は互いに矛盾するようだが、これはどういふことなのだろうか。

ここで注目したいのは、李白の詩の中に東晋の謝安のことを典故としたものが多くあるということである。例えば、「裴十八圖南のかた嵩山に歸るを送る二首その二」には、「謝公終に一たび起たば、相い與（とも）に蒼生を濟はん」（東晋の謝安は世俗の名声を好まず、隱遁生活をしてしたが、一たび時が来たなら立ち上がって政治

に参加し民衆を救ったということだ。君も同じ様に隠遁するわけだが、時が来たらまた世に出て私と共に民衆を救済しよう」とある。謝安は東晋の人で、しばしば官となるよう召されながら仕えず、長い間野にあって自然の中で風流の遊びをしていた。四十才になって初めて自分の意思で仕え、桓温の北征の時に呉興の太守となり、前秦の苻堅の軍に対して征討大都督となったりして活躍した。この謝安のような生き方、すなわち、普段は野にあって風流の遊びをし、いざ立つべき時が来たなら中央に出て大いに活躍するといった生き方である。私が思うには、これこそは李白の理想だったのではないだろうか。

さらに、この他にもう一つ注目したいことがある。ここで「金門に蘇秀才に答ふ」を見ると、「鼎に銘し儻（も）し遂げたりと云はば、扁舟方に渺然たり」（もし功績を残して名を上げ、先祖の行跡を銘文に刻むことができたなら、その時こそ一艘の小船を浮かべ、昔越の范蠡が世俗を離れてどこかへ行行ってしまったように、私も世俗を脱してどこかへ行行ってしまいたい）とある。ここで言っているのは、朝廷の中で高官に登りつめて名声をあげたなら野山に帰って隠遁生活をして道教を極めたいということである。これもまた李白の思想の中で重要な位置を占めるものだろう。

このように、李白の理想は、普段は野にあって風流の

遊びをし、いざ立つべき時が来たなら中央に出て大いに活躍するといった生き方であったり、名を上げて野山に帰るといったものであったろう。ただし、李白には、その二つの願望のうちの片方だけを歌った詩が多い。それは、彼がその時その時の自分の思いを自由に詩の中で述べる詩人であったからであろう。李白は、その詩を作るときの自分の状況や気分により、ある時には中央の政治の世界で名をあげたいと歌い、またある時には野山で仙界を求めたいと歌ったのである。李白は先ほど述べたような理想を持っていたために、人生の様々な場面において参政と隠遁の両方の間でゆれれ動き、その時により強く思う方を詩に表したのである。

つまり、出世欲と求仙願望が、彼の飲酒詩を生み出した情念の両極にあり、その錯綜こそが李白の飲酒詩が人々に感動を与える原動力になっているように思われる。この二つの矛盾することを酒を飲むことによって融和して素晴らしい詩を残したのである。出世運に恵まれず、一方では仙界を現実視して隠遁しきれなかった李白が、詩人の才能を縦横無尽に發揮することのできた空間がそうした飲酒の世界にあったのである。

#### 四

李白と同様、大の酒好きの詩人として有名なのが陶淵

明である。陶淵明は東晋末、宋初の田園詩人で、二十代の末に江州祭酒として初めて官となり、四十代の初めに彭沢の県令となったが、八十余日で辞職し、代表作の一つである「帰去来の辞」を作って帰郷した。

李白の詩の中でも、酒が好きで風流を解する隠遁生活者として陶淵明が比喻などに使われているものが、十七首ある。ところで、李白も陶淵明も共に酒好きで有名であるが、李白にとつての酒と陶淵明にとつての酒はまったく同じものであったわけではない。そこで、両者の酒に関する差異を明らかにしたい。

まず、二人が他の人達からどのような酒飲みとして考えられていたかを見てみたい。李白は自ら酒仙翁と名のるくらいに酒のみであることを自認していたが、それは陶淵明も同様である。「五柳先生（陶淵明は人々にこう呼ばれたりもした）伝」には陶淵明自身の言葉として「性、酒を嗜む」とあるし、後世の中唐の白居易などは、「篇章我に飲を勧む、此の外は云ふ所無し」（「效陶潛體詩」）とまで言っている。

李白には酒にまつわるユニークなエピソードが数多くあったが、陶淵明にも「酔石」などの酒に関する伝説がある。後の詩人たちに酒に酔うことの好きな詩人として崇拜され影響を与えたという点では同様である。しかし、伝説の量や内容を比べると、李白のほうが自ら「酒仙翁」と号するにふさわしく、陶淵明を圧倒している。

次に、二人の飲みっぷりについて見たいと思う。まず陶淵明であるが、彼の「飲酒」詩二十首の序文を見ると、陶淵明の飲みっぷりというのは、名酒が手に入るとそれを飲み尽くすまで毎晩飲むといったようなものであったようである。このあたりは、李白とも通じるものがあるし、酔って興が起ると多くの詩を作りあげるところなど、まさしく李白を思わせる。しかし、「飲酒その七」に見られるように、酔って気持ちよくなる頃には、ちょうど酒の壺も空になり、それ以上の深酒はしないと書いた、ほどのよい飲みっぷりが見て取れる。李白が何もかも忘れて酔って寝てしまいたいと言っているのに比べると、かなりおとなしい飲み方である。

「飲酒その七」からもう一つ分かることがある。それは、陶淵明が、酒を寂しさを紛らわすための道具としていたということであり、それは、「飲酒その四」にも現れている。

まとめてみると、李白も陶淵明も共に大の酒好きとして名をなした詩人であるが、李白の方は酒について豪快、奔放なイメージがあるのに対し、陶淵明は静かな、控え目なイメージがある。そして、これらのイメージは、そのまま二人の詩のイメージに通じている。それを言葉に表してみると、陶淵明の詩の方は、自然との一体感を通じての悟りが根底にあり、酒を飲むという行為によって、諦念を伴った憂愁が表現される、極めて静かなものであ

る。これに対し、李白の詩は、雄大な自然に対して感動を伴った主観的なとらえ方をし、酒を飲むという行為によって、しばしば現実を超越し、仙界という彼の理想郷を描いたり、自分のその時の心情をそのまま表したりする、豪快かつ奔放で極めてダイナミックなものである。

## 五

伝説に見られる李白像は、簡単に言うならば豪放、飄逸といったものである。「李白一斗詩百編」という言葉は多くの人々に知られ、李白の酒豪ぶりや天才ぶりが現実の李白以上に膨らんで後世に伝わってきた。その典型的なものが「太白捉月」伝説であろう。

李白は、政治の世界に進出して名をあげることと、仙界に生きるということの両方を達成するという理想を持っていたものの、彼の一生を通して得たものは、「詩人李白」としての名声だけであった。翰林院供奉として宮中に仕えた時に、玄宗皇帝から「詩人」として寵愛されたことも、人々から「詩人」としてもはやされたことも、李白本人からしてみればそれ程大きな意味はなく、彼の心は満たされることが多かった。

そうした心を満たしてくれたのが酒である。彼は酒を飲むことによって現実の憂いを晴らそうとし、時には現実世界から全く離れて心を仙界に遊ばせることもあった。

しかし、前に見たように、このような彼にとって是不幸な状況が、逆に彼に生き生きとした詩の世界を創造させる結果となったのである。

酒を愛する詩人は多くいたが、李白だけが異彩を放つのは、酒を飲むという行為によって、出世と求仙という矛盾をはらんだ願望を、生きた言葉で動的に表出し得たからである。だからこそ酒にまつわる数多くの伝説も生んだにちがいない。いわば、その伝説に語られた李白こそが、人々の心の中に生きる「詩仙李白」の真像なのである。

(すぎした かずなり 上田市 北小学校教諭)